ブリッコ撲滅委員会

志村つるぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリッコ撲滅委員会

【Nコード】

N9196I

【作者名】

志村つるぎ

【あらすじ】

近未来の日本でブリッコ病原菌が蔓延！
作業効率を下げるブリッコは資本主義社会の敵だ！！
病原菌を隔離、撲滅しようとする政府と、ブリッコ側に立ち差別偏見、迫害に立ち向かうリサが戦いを始める・・・。

プロローグ 1

プロローグ

少女はクラスメイトの、黒髪の子を睨みながら、ノートに何か書き付けていた。睨まれた女子は男子の落とした鉛筆を拾い上げる場所だった。

「はい、これ落としたよお」

語尾が伸び、それを聞いた少女は眉間にしわを寄せた。また手が動く。

「ありがとう」

男子は優しい笑顔で受け取った。

ほらね、全然違う。あたしが落とし物拾ったって、ああ、とかしか言わないじゃん。ありがとう、ってどういうわけ？

「いいえ、どういたしまして」

女子の首は左に傾き、男子を見上げるようにして、微笑む。それを見た少女の眉間のしわは、ますます深くなる。

あいつ、さっきの体育の時間だってマット敷くのにチヨ一時間かかったんだ、ノ口いくせに頑張ってます、みたいな顔して運びやがってさ、何か言ったらこっちがいじめてるみたいに見えるんだよね。センサーもあいつには言わないでさ、同じ班のあたしらが「早くしろ」って叱られたじゃん。それに跳び箱三段も跳べないし。跳べないだけじゃなく、跳び箱崩しやがって、すぐ横で倒立の練習してたあたしの肩に三段目が降って来たんだよね。文句言っても、え？とか言うだけで全然理解できないし、マジいらつくんだよね。いつもすげー鈍臭いくせに、何さっきのあれ？男子が何か落としたらすぐ気付くんだ。反応よかったよね。オカシくね？ほんと、死ねってかんじ。

少女は視線をノートに落とした。

「死ねブリッコ」

女は四半期売り上げ推移のグラフの下に、そう打ってしまった。しばらくの間削除できずに画面を見つめていると、乾いた目に涙がにじんだ。

「こんな歌手の、どこがいいんだろうねえ。わたしは腹が立って腹が立って、しょうがないよ」

妻は、寝転がってテレビを見ながら、そう呟いた。

液晶画面の中で、ピンクのワンピースを着た少女が、時折小首をかしげ、舌足らずな甘い声で音程を上手に外しながら、ぎこちないステップを踏んで歌っている。

「たしかに時代錯誤だけど、それがかえって新しいんじゃないの。いいと思うけど」

夫は、妻の背後のソファに腰掛けてそう言った。実際、その歌手はかわいくて好みだったのだ。

夫の言葉が終わるのを待たずに、妻はすごいスピードで体を起こし、振り返って夫を見た。その瞬間夫の脳裏に、悪鬼羅刹のごとく、という言葉がよぎった。あれ？ この言葉、何で読んだんだっけ？

四谷怪談？ 八墓村？ スティーブン・キング？ でもどの本も、こんなには怖くはなかったと思うけど。

「あんた、安月給なのに小遣い3万も貰えてんのは、だれが働いてるからか、わかってんでしょうねえ？ 今ちらつと、この女のことかわいって思ったんでしょ？ ふざけんじゃないわよ、わたしら必死こいて働いて、家のこと、ひいては日本のことを支えてやってんじゃないの。それをだらしのない男がああいうバカで生産性のないブリッコ女にかまけて騙されて、かわいいだの何だのって甘やかすから、わたしらやってられんって言うのよ。ブリッコがどれだけわたしたち働く女の足を引っ張ってると思うの？ だいたいあんたたち男ってのは」

夫は、はい、はい、と体を小さくして妻の怒号をやり過ぎそうと

した。妻は最近、いつもこうだ。ふた言目には女が日本を支えてる、男はそれを正當に評価しない。役に立たないブリッコのケツばかり追いかけて回しやがって。

きつとテレビの受け売りなんだ。だいたい政府が女をちやほやしすぎるからいけない。次の選挙で女性票が欲しいのはよくわかるけど、持ち上げられていい気になった女より怖いモノがあるか？

「ほんとに能力があるのは女なんだからね！ 働く女なくして、日本が発展していくと思ってるのっ？」

はあ？ おまえはおれが朝出ていく時も夜帰る時も、寝てるかテレビを見てるかじゃないか。一日四時間程度のパートで、日本の発展だと？ 恩着せがましいガミガミ屋の中古女より、バカでも生産性がなくなっても、かわいくて従順なブリッコのほうがいいに決まってるだろうが。

けれども夫は、ごめんなさい、ごめんなさい、と謝った。小遣いを3万から2万に減らされるのが怖いからだ。気を使ってベランダで吸う煙草を取り上げられるのが怖いからだ。悪鬼羅刹のごとき妻が、怖いからだ。

先月同じ課の後輩が、ブリッコと呼ばれる女性のミスをかばってやって、左遷させられたばかりだ。うちの会社は女が多いからな社長もやつらの声を無視できないんだ。しかしそう考えると、なんてこった、おれの周りは悪鬼羅刹ばかりじゃないか。

「ごめんなさいごめんなさい、働ける女がいちばんです。ブリッコはカスです。社会のゴミです。ぼくが間違っていました、許してください」

1

ブリッコは感染する、というニュースが日本列島を震撼させた。

政府はブリッコ対策委員会を設けるにあたり、国立情報大学社会学部助教授、三木田リサを有識者の一人として招聘した。

5年前、ブリッコを社会から追放せよ、という強い世論に押される形で「ブリッコ矯正施設」が作られブリッコを収容するようになってから、リサは一貫してブリッコたちの人権尊重と矯正施設の環境改善を訴えて来た。

32歳という若さで、リサはメディアに引つ張りだこだった。それはリサの立場が少数派であるからにほかならない。世論はリサを叩くことで、団結しようとする。

5年前に「ブリッコは病気である」と、ある学者が発表した。個人の性質、性格ではない。ブリッコたちには共通して、脳の同じ部分にポリープが発見されたのだ。その異常により、語尾が伸びる、首を傾げる、物事の理解が困難になる、などの症状が現れることがわかった。けれど原因がわからなかった。ところが今日、ブリッコはウイルスによる、との発表が、ブリッコ研究医師団からなされたのだ。

時計を見ると10時だった。午後1時に総理官邸にて、ということだったので時間はあつたが、何も手につかない。リサは仕方なくテレビの電源を入れ、リモコンを手にとった。

「税金がもつたいないから、早く殺しちゃえばいいんだよ」

乱暴な声がまず耳に飛び込んだ。素人討論番組だ。出演者はみんな首がもげるほど深く頷いている。リサは番組表から報道番組を探して、チャンネルを変えた。

「一人残らず矯正施設にぶち込むしかありませんね」

映像が変わった瞬間、いつも頑なに中立の立場を取るアナウンサーがそう言った。

リサの元にファックスで送られてきた医師団の発表には、感染の危険性があるのは、病気などで免疫力の落ちている人、高齢者、乳幼児、と書いてある。しかし健康な多くの人には感染しない、という重要な事実が、報道では意図的に隠されていた。

リサがヤケになって番組サーフィンしていると、電話が鳴った。テレビの音量を絞ってから受話器を取ると、大手新聞社を名乗る男

性の声が聞こえた。

「三木田先生、本日の夕刊分にコメントをいただきたいのですが」
リサはすぐに答えた。

「ごめんなさい、政府の対策委員会に呼ばれてますので、もう家を出るんです」

5分あれば取材には応じられるが、何も話したくないのだ。

「じゃあ、携帯電話にもう一度かけるから、話しながら移動してくださいよ」

男の声が急に馴れ馴れしくなった。いや、違う。リサは嫌悪を感じた。馴れ馴れしいんじゃないやなくて、横柄になったんだ。

「いろいろ準備もありますので、お断りさせていただきます」

リサの言葉に、はつきりと鼻で笑ってから、男は答えた。

「ああ、そうですね。センセイ、ブリッコどもといっしょに殺されますよ」

プツン、と通話が切れた。今の男の言葉が世論そのものだろう。リサはそう思って、独り言をつぶやいた。

「女に洗脳された男どもめ」

はじめ、ブリッコ追放の声を上げたのは女性たちだった。多くの男性たちは、どちらかというときと否定的に見ていたはずなのだ。それなのに、今のこの現状はどうだ。最初からそうだったかのように、男たちまでブリッコを迫害して社会の隅に追いやり続けている。

女たちが大義名分を口にし出したときから、反論は許されなくなつたのだ。ブリッコは仕事の効率と生産を下げる。野放しにしておいては、国益を著しく損ねるではないか。そういった大義に反論すると、次は反論した者が「非国民」として吊るされる。

食欲が湧くはずもなく、リサは朝食を取らず、サプリメントだけを口に入れた。そしてまたテレビの音量を上げ、チャンネルサーフィンを始めた。どの番組を見ても、世論はすでに決まっていた。だれもがブリッコ矯正施設の管理強化を、いや、それより手っ取り早い方法として、病原菌の撲滅を願っていた。

何の対策も講じられないまま、あつという間に時間が過ぎた。リサは隙間のないスキニーパンツに細身のジャケットを羽織り、銀の細いアンクレットを付けて、家を出た。

リサはこのシンプルなアンクレットを、ブリッコについて語るときには必ずつけることにしている。何の役にも立たず、人目に触れることもない銀の細いアンクレット。社会から大いなる無駄、非効率化の諸悪の根源というレッテルを貼られたブリッコを擁護することとは、能率主義を掲げる社会に真っ向から反論することだ。できるだけ無駄なものを身につけることで、リサは戦闘態勢に入ることができる。

リサは背筋を伸ばして、早足で歩いた。

「三木田先生、どう言い訳されるおつもりですかね」

リサが総理官邸に向かっていると、湿っぽい男の声が追いついた。リサの顔が引き攣ったように歪む。

リサには顔を見なくても、声の主がわかっていった。民友党の平良議員だ。ブリッコ差別論者。これまでもテレビ番組で何度となく論を戦わせたことがあった。

「言い訳って、何ですか？」

リサは必要以上に冷たい声で言った。顔はまだ見ない。というより、見る気がしない。

「ブリッコ、感染するんですよ。あなた今まで『ブリッコの隔離は不当だ』って主張してきたでしょう。それを真に受けてブリッコ放し飼いにして、ブリッコが蔓延した地域なんかがあったとしたら、どんな言い訳をされるのかなあ、と思っただけですよ。世間の非難はあなたに集中しますよ」

言われなくてもわかっていた。リサはもう充分、世間の考えていることがわかつている。

「調べればすぐわかりますよ、きっとあちこちでそういう不祥事があるに違いないんだ。みんな、怒ってるだろうなあ」

リサは足を速めた。平良は中年の中でもとびつきり脂ぎっていて、

こういう時に浮かべる笑顔は彼の醜い表情の中でも、群を抜いていやらしい。そのにやにやした顔を見ないように、見ないように歩いているのに、平良は歩みを揃えて、ぴつたりとついて来た。

「対策室設置、っていつてもね、これは三木田先生、あなたの吊るし上げですよ。よくもまあ、ノコノコとやってきましたね。いやあ、尊敬しますよ。反省してるんですか、今までの強気の発言」

平良の言うとおり、リサは今まで強い論調で、ブリッコの解放を訴えてきた。最近出た番組の中でも「ブリッコの痛みがわからないバカな不感症のおっさん議員」と言い放っていた。直後に無言電話が頻繁にあつたが、あれはきつと平良だったのだろう。

平良を無視して、リサは首相官邸正門を駆け足で潜り抜けた。取り壊しが決まっている噴水を横目に、対策室の設置されたホールへと向かう。振り返ると、言いたいことを言い終えたのか、平良が今度はひどくゆっくり歩いていた。余裕を見せたいのかもしれない。

「ゲス男」

リサは肩を怒らせて前庭を抜けた。

「三木田先生ですね」

ホールに入ろうとした時、だれかがリサの背後から声をかけた。リサが立ち止まって目を向けると、まだ若い見知らぬ男性だった。

「はじめまして。ぼくは自衛省の佐々木邦生くにむねといます。役職はありません。ただ、ブリッコ問題には興味があつて、そのことが霞ヶ関ではちょっと知られています。もちろん三木田先生のごことは、よく存じ上げております」

佐々木はす、と手を出した。

「お会いできて、光栄です」

リサは機械的に手を握り返し、唇だけで笑った。

「どうも。今日は官僚と政治家でよつてたかつてわたしを吊るし上げようつていうの？ 有識者会議だつて聞いたんだけどね」

平良に浴びせられた言葉による鬱憤を初対面の佐々木に向けて発してしまい、リサはすぐに後悔した。

「ごめんなさい、ちょっと気が立ってるもんだから」

佐々木は笑って首を振った。

「いえ、いいんです。官僚と政治家が多いのは確かです。しかもこの問題に関しては素人同然の、です。これでは有識者会議にはなりません。ブリッコ問題に正面から向き合っているのは、先生を含めて三、四人というところでしょう。あとの十数人は冷やかしです。というより」

佐々木は言葉を止め、まっすぐリサを見て言った。

「先生にざまあみろ、というただけに、半ば自主的に集まっています」

それを聞いて、リサの頭に血が上った。わたしは何のために呼ばれたのだろう。何のために時間を割いて、会議をするのだろう。

「で、あなたもわたしにざまあみろ、と言いたいんですか？」

佐々木からは敵意が感じられないにもかかわらず、思わずリサは佐々木を睨みつけた。

「三木田先生」

佐々木はゆっくりと言った。

「みんながみんな、先生の敵ではありませんよ。少なくともぼくは、先生の意見におおむね賛成です。これから少しお辛いでしょうけど、先生は正しいと思うことをおっしゃってください」

そこに平良が追いついてきた。

「先生、さすがにいい男を見逃しませんねえ。色仕掛けで仲間を引き入れるおつもりですか？ へへへ」

佐々木はとつさに言葉を返せず、リサは当然のように無視した。

平良も無視されるものと思っていたらしく、そのままホールに入っていた。

「どうもイライラして、キツイことを言っでごめんなさい」

リサは言いながら、初めて佐々木を正面から見た。年齢はリサと変わらず、32、3というところだろう。いい男というわけではないが、清潔そうな印象だ。短く刈り込んだ髪とやけに白い歯が、官

僚ではなく学生のように見える。しかし若くて清潔感がある、という一般的には好ましい属性も、これからの会議の中では少しも役に立たないだろう。

会議が始まる時間、リサは席に着いたメンバーを見回して閉口した。

リサと同じようにブリッコ擁護派で有名な評論家加藤信二と、ブリッコ救済会の会長小原洋介を除けば、あとはブリッコ迫害家とでも言ったほうが合っているような、極端なブリッコ差別論者ばかりだった。しかもそのほとんどが政治家、官僚である。医療関係者が一人もいないところを見ても、この会議に何の意味もないことがわかる。

「みなさん、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。この度の発表には、驚かれたことと思います。政府としては、一刻も早い対応を迫られているわけでありまして、しかもその対応は正しいものでなければなりません。今までのような甘い見通しの対応をしているのは、国民に烈しく非難されるでしょう」

「そのとおり！」

「首相万歳！」

リサが合いの手に呆れて首相の取り巻きを見回すと、平良と目が合った。平良はさもうれしそうに、にやり、と笑った。

首相の挨拶が終わると、議長が一礼した。

「議長の滝川です。本日、みなさま方には今後の政府の方針について、意見を戦わせていただきたいと思っております。まず、ブリッコ矯正施設についてですが」

「議長！」

平良が勢いよく手を挙げた。

「今までブリッコは隔離すべきでない、とかナントカ言っていた人がここにおられるわけですが、ブリッコとともに暮らすことが安全でないことが発表されました。適切な隔離を行なわなかったために感染した不幸な患者たちから苦情が殺到すると予想されるのであり

ますが」

「三木田先生、そのへんはどうお考えですか」

平良の言葉が終わる前に、社産党の車崎がリサを睨みながら、ゆったりした口調でそう言った。さっそく来たか。リサは毅然と顔を上げて、答えた。

「わたしたちのだけれもが、今日まで感染の事実を知りませんでした。知らなかったことが罪だと患者が訴えるなら、真摯に耳を傾けますが、しかし問題は、そうして感染してしまった患者たちに、これから何ができるかです。わたしはたとえブリッコが感染するとしても、不当な隔離、迫害は止めなければならぬと考えております。それは今までの考え方と何ら変わるものではありません」

車崎が年のせいであつたんだ頬の肉をだらり、とさせたままでぬめり、とりサを見上げた。

「不当な隔離。不当って何ですか。治らない、惨めな病気がうつるんですぞ」

評論家の加藤が口を挟んだ。

「不当というのは人権を守る観点から見て当を外れている、という当たり前の意味ですよ。やむを得ず隔離せざるを得ない場合であっても、そのやり方に人権侵害がないかどうか、きちんと検証されるべきである、とわたしたちは言っているのです」

「あなたには聞いとらん。ブリッコ好きのスケベ親父が」

車崎がぐるり、と首を回して加藤を睨むと、平良が幫間のように「そうですぞ」と言った。

リサは平良から顔を背けた。

「加藤さんのおっしゃったとおりです。どうあれ、わたしは今までどおりブリッコ矯正施設の環境改善を求めます」

「殺せ殺せ。ブリッコ全員殺せばいいんだよ」

突然カン高い声で叫んだのは法審大臣だった。名前のわからない官僚がひとり、そうだ！と立ち上がった。

「ブリッコなんかが増えられちゃあ、真面目に働いてる我々、たま

つたもんじゃありませんよ。なにしろあいつら、日本語通じないしさ、なんかナヨナヨしてキモイんだよね」

「そうそう、施設にもお金がからなくなるし、殺しちゃえば」

この発言にはブリッコ救済会の小原が色めき立った。

「あんた、そんなこと言っていていいと思ってるんですか！ あんたの息子や娘がなっていたかもしれんですよ！」

法審大臣は小原に向かって放屁した。

「だからそうならんうちに、病原菌殺しちゃってって言ってんだよ。自分の子が仕事できない無能になったら、だれだって困るでしょうが。おれの子がブリッコ？ ああ、日本はどうなっちゃうの。みんなが不幸になる。殺していいってば」

小原は机を叩いて抗議したが、法審大臣はあさっての方を向いている。リサは我慢できずに口を開いた。

「いいですか、あなたが役立たずの大臣で、奥さん怖さにブリッコの迫害をしてるだけだといっても、だれもあなたを殺したりはしません。女性票を取る者だけが選挙に勝つ、という理由だけで五年前に矯正施設を作った党の幹部だといっても、殺したら殺したほうが悪いんです。どんなスケベじいにも人権があるからです。生きて楽しむ権利があるからです。そこんとこ、よく考えてください」

「おい！ だれに向かって言ってるんだ！」

法審大臣ではなく、まわりの政治家が数人怒って立ち上がった。

「大臣はブリッコなんか、断じて、断じて好きじゃない！」

「そうだ！ 政治家の家はみんな力カア天下で、ブリッコ睨んでないと家に入れてもらえない、なんてことはあり得ない！」

「あわわわわ、もうそれ以上言わんでよろしい」

なぜか首相が止めに入った。

リサが再び口を開こうとしたとき、向かいに座っていた佐々木がす、と立ち上がった。

「首相、それに先生方、落ち着いてください。建設的な話し合いをしましょう。政府としてブリッコを蔓延させないように何ができる

のか、それを考える会議ではありませんか。何も三木田先生はブリッコを広めようとなさっているわけではありませんよ」

佐々木の立ち姿は、醜い老人たちの中にあつて、とても清々しく若々しかった。しかしあまりにも頼りなかった。

場のムードは一気に、佐々木に対する非難に変わった。

「何を偉そうなことを言つとるか、若造が」

「だいたいだれなんだね、君は。え？　せめて次官にでもなつてから発言したまえ」

「ブリッコの肩なんか持つてちゃあ、ぜつたいに出世できないぞ」

「そのスーツはどこで買ったんだね。色がよくないよ、色が」

「有識者会議で何かを考えるなんて、ナンセンス極まりない。君はほんとに官僚かね」

佐々木は何も言わずに座った。何を言つても無駄だった。リサの苛立ちは極限に達した。

「じゃあ、何のために集まつたんですか」

リサは精一杯の大きな声で、でも決して乱れずに言った。

「無駄を嫌つてブリッコ矯正施設を作られたあなたたちが、どうしてこんな無駄な会議をなさるのか、わたしにはわかりません。議長、早くまとめてくださいませんか」

議長の滝川は、は、っとして、ねずみのように首相と法審大臣、そして車崎をキョロキョロと見回した。そして深呼吸をして、さも威厳のある顔を作つて、こう言った。

「では、多数決をとります。ブリッコ撲滅に賛成の方、挙手を」

つづく

「先生がた、申し訳ありませんでした」

会議の後、リサは佐々木。加藤、小原とともに日本料理店に入った。そのまま帰るにはあまりにもひどい会議だった。そしてあまりにもひどい結末だった。だれかと何かを言わないと、眠れそうになかった。

仲居が八寸と食前酒を運んできた。リサは、野党が出した「禁煙・禁酒法案」を思い出した。ブリッコ矯正施設ができてからというもの、あらゆるモノに社会の無駄というレッテルを貼って、規制する動きが広がっていた。

「そのうち懐石料理なんか、時間の無駄だ嗜好品だ、といって禁止されるんだらうね」

小原が言った。同じことを考えていたのだらう。

「国民を煽るだけ煽っておいて、自分たちは無駄を贅沢に楽しむんだらうがね」

「効率化、合理化、と言えば言うほど選挙に勝つんだもの。法案の出し合いで、いったいどこまでエスカレートするのやら」

加藤とリサはそう言っ、力なく笑った。佐々木はそれを見て、肩を落として呟いた。

「本当に申し訳ありません。こんな結果になってしまっ……」

「佐々木くんが悪いわけじゃないだらう。謝らなくていい」

加藤がそう言ったが、佐々木はますますうなだれた。悲壮な顔をしている。

「なんというか、霞ヶ関の一員として、とんでもない罪悪感を感じているんです」

リサは箸を取って手を合わせた。

「ともかく、いただきますしよう。せつかくのお料理なんだから」
佐々木は何か言いたそうにしながらも、食事を始めた。リサも鱧の煮ごりに箸を入れた。

「それにしても今朝の時点では、どこのニュース、ブログ、掲示板も、気味が悪いほど同じ意見ばかりですね。つまり、ブリッコを殺せ、って」

食事しながら話すと、問題が軽くなっていい。重大な問題も、こうして箸を動かしながら話すことで、少し重力に抗うことができる。小原が乾いた声で、は、は、は、と笑った。

「少数派がひとことも口を出せない、というこの空気は、見事ですね」

リサは、小さな花のように盛られた鴨コースに箸を差し入れながら、頷いた。

「撲滅を叫ばないと、自分が殺されかねない雰囲気なんだもの」

「しかし、なんとか止められませんか、撲滅なんてバカなこと」
加藤が呟いた。

「今の状況では、反対派を募るだけでも大変困難ですよ」

重力がふと戻る。箸を上げるのが急に億劫になった。ブリッコ撲滅は何としても止めるべきだ。でも反対派なんて、居たところで声を上げられるわけがない。十二畳の個室の中に、ひどく重苦しい沈黙が流れた。

リサはなんとかそれに抗おうと、運ばれてきた鮎の塩焼きをつまんでみる。骨抜きをして口に入れ、顎を動かすと、少しだけ空気の流れがよくなったような気がした。

「行動しましょう。ブリッコ撲滅計画はすぐには実行されないでしょう。国民への発表もまだ先でしょう。それまでの時間で、何とかしなくちゃ。実行を引き延ばすだけでもいいんです。その間にワクチンが開発されれば、世論が変わる可能性だってあります」

鮎を食べ終わってリサが言つと、たしかに空気はパリツと音を立てた。小原が強く頷いた。

「どうでしょう、三木田先生。三木田先生はブリッコ患者とその家族にとつて、もつとも信頼できる人です。わたしたちは世間にそれほど認知されているわけではない。三木田先生がリーダーになって、反対運動を展開できませんか」

「もちろんわれわれは全力で協力します」

加藤が言葉を継いだ。リサが佐々木を見ると、佐々木も熱いまなざしでリサを見ている。

「わたしでよければ、力を尽くしたいと思います」

リサはそう答えた。全員が握手を交わした。

リサは足首のアンクレットにそつと触れた。

「ブリッコの家族たちは必ず運動に参加してくれると思います。手分けして、全国の隔離施設で収容者名簿を手に入れることから始めたいと思うのですが」

リサが言うと、加藤がそうですね、と答えた。

「撲滅については政府から箝口令が敷かれていますから、一般に賛同者を募ることができませんしね」

「でも、収容者家族にはどう言って運動に参加してもらおうんですか？ 箝口令は家族にも生きてるでしょう」

小原が不安そうな顔をリサに向けた。

「名簿を手に入れてから、計画は綿密に立てます。一つ間違えたらすべてが水の泡になりますから、慌てて決めるのは命取りです。わたしも練ってみますけど、みなさんもいい案があれば、すぐに連絡をください」

隔離施設は全国に六つある。持ち出し禁止の名簿を手に入れるのは難しいかもしれないが、リサも加藤も小原も、ブリッコ関係者には同志として名前が知られているので、入手できる可能性は多分にある。それに、自分たちがどうにかしなければ、計画を前に進めることはできないのだ。

だれがどの施設に行くかを決めただけで、具体的に撲滅反対運動を始めたような錯覚を覚えた。リサはもう一度、アンクレットに触

れた。

次の日の午後、リサは関東地区ブリッコ矯正施設に向かうために家を出た。

矯正施設は東京都内から一時間半離れた千葉県の駅から、さらに三十分歩いて、ようやくその姿を現す。

全国六ヶ所の矯正施設はすべて、交通機関のまったくない場所に建てられている。

「みんな、ブリッコが存在する、ということをおぼれていたのよね」
早足で歩きながら、リサはつぶやく。

「どうせ忘れてるんなら、忘れたままでいいじゃないの。いくら感染するっていつても、こんな場所からウィルスなんか飛んで来やしないわよ」

リサは矯正施設を定期的に訪れている。それは実態調査だけが目的ではない。リサの幼なじみ、川田美奈に会うためだった。今日もまず美奈に会ってから、名簿を手に入れようと思っている。

川田美奈は中学生のころから、ブリッコ、カマトトぶってんじやねえよ、といじめられていた。今から思えば、美奈は決して「ぶって」なんかいなかった。美奈は懸命だったのだが、教科書を出すのも、提出物を集めるのも、何をするのも人より遅かった。そのとき首を傾げ甘えるような表情を作るのも、わざとではなかった。

けれども当時のリサは、それが病気だとは知らず、いじめられるのがイヤなら直せばいいのに、と思うことだってあった。

思いながらも美奈を放っておくことができず、いじめられている美奈を半ば強引に教室から連れ出して、休み時間のあいだ屋上で過ごしたりした。そのせいでリサまでが無視された。

「もう、ほんとに遠いわね」

矯正施設に着いて、リサは苦笑した。軽く汗ばんでいる。

入ってすぐのエントランスでは、守衛の青木が音楽を聴いていた。たまに抜き打ちで査察に訪れる役人を除いて、施設の職員は民間の、

いわば協力者だ。身内がブリッコとして収容された人や、その理解者などが少ない賃金で働いている。

いつもは軽く頭を下げて通り過ぎる守衛室だったが、リサは立ち止まってガラスのスライドドアを開けた。

「三木田先生」

青木はリサの姿を認めると音楽を止め、立ち上がって深々と頭を下げた。

「こんなときに、いらっしやったださるなんて、ありがとうございます」

青木の娘は関西の企業に勤めていたが、五年前に関西地区矯正施設に入れられた。娘のいる施設とは違うけれど、何とかブリッコたちの役に立ちたい、ということと、この施設の守衛に就いた。しょっちゅう安い賃金から、甘い菓子や本などを買ってきては収容者全員に分けている。

青木は目に涙を浮かべて、リサの手を取った。

「感染すると報道されてから、身内以外の面会者はだれも来ていません。先生がいらっしやっで、みんな喜びます」

リサは一階奥の談話室にだれもいないことを確認してから、声を低くして聞いた。

「中のみんなは、発表を知ってるんですか？」

青木は眉根を寄せ、肩を落として首を横に振った。だがそれは、質問に対する否定の意味ではないようだった。

「わたしからは言っておりませんが、電波を送受信できるものは禁止されていますから、どうやって知ったのかわかりません。でも今日の朝食時に、数人が口にして、すぐに全員の知るところとなりました」

リサの手を握る力がなくなり、青木の両手は力なく体の横にぶら下がった。

「信じられませんが、昨日来た面会の親族が伝えたのでしょうか。でも本人たちはいたって冷静でした。今さらどうでもいいと思ってい

るのか、それとも理解できていないのかはわかりませんが。職員のほうがシヨックで、昨夜は宿直と一晩明かしました」

青木の目が赤く涙目なのは、そのせいもあるのだらう。リサは青木の肩に手を置いた。

「青木さんが体を壊してはいけませんよ」

禁止されている携帯電話の電源を落とし、青木に渡した。すべての来訪者はここで携帯電話を預ける規則になっている。

青木はそれを受け取って、深々と頭を下げた。リサは、じゃあ、と言って二階への階段に向かった。

階段の壁には、優しい黄色と桃色の布地が掛けられていた。職員がコンクリートの冷たさを隠すために、自分たちで探して来た布だ。二階には、五十メートルほどの廊下の両側に、ずらりと個室が並んでいる。個室にはドアがない。ひとつひとつの個室を、注意深く見ながら進む。中ではそれぞれが、読書にふけていた。

施設内の最大の娯楽は、差し入れられる本だ。テレビもラジオも禁じられ、体育館も図書室もなく、娯楽そのものを政府によって取り上げられているブリッコたちには、差し入れの本だけが楽しみだった。

一階の談話室でおしゃべりをするのは、夕食後という習慣になっていた。だれかが決めたわけではない。談話室といっても、コンクリートの壁に囲まれた、何も無い、少し広いだけの部屋だ。だれもいない時間にそんなところで座っていても、余計に寂しいだけなので、昼食後のこの時間はたいがい全員が個室にいる。

数人が足音に気付いて、顔を上げ、上目遣いで微笑む。「こんにちは」と声を掛けると、小首をかしげて「こ・ん・に・ち・わぁ」と甘い声を出す。

美奈の個室は奥から五番目だった。リサが入り口の壁をコンコン、と叩くと、美奈は小説から顔を上げて、小動物のような大きな目をパチパチ、と瞬かせた。

「来てくれたの？ とっても嬉しいわぁ！」

「どう？ 元気にしてる？」

リサはいつも座るクッションを敷いて、床に腰を下ろした。クッションは自分が差し入れたものだ。美奈は母親にもらったピンクのワンピースを着ている。

「うん。まあまあ元気よ。リサも病気とか、してなかったあ？」

目の位置は美奈のほうが高いのに、美奈はリサを見上げるようにしか見ない。リサはさっぱりと笑って、うなずいた。

「わたしは元気。心配ないわ」

小さな部屋を見回す。入り口の右側に美奈の座っているベッド。オフホワイトのベッドカバーは実家からの差し入れだが、全体にうつすらと汚れている。美奈の場合、週に一度は家族が来て洗濯したものと取り替えてくれるのだが、それでも汚れるスピードのほうが速いのだ。

壁には三枚のポスター。どれもキティちゃんのイラストだ。一枚はキティだけで、こちらに向かって手を振っている。ベッドのすぐ横のポスターには、黄色いリボンのネコとキティが手をつないでいて「we are good friends」と丸文字で書かれている。もう一枚は個室に入ってすぐ左の壁で、キティが和服を着ているものだ。どれも五年間貼り替えていないので、やはり薄汚れている。もともと実家の美奈の部屋に貼ってあったものを、持って来たのだ。

美奈に視線を戻すと、彼女は首を左に大きく傾けていた。美奈は重度の患者なので、この仕草が強く出る。首の腱鞘炎のため、痛み止めの薬が必要なほどである。

「よくわかんないんだけどお、ビョーキ、うつるんだって？」

美奈の質問にリサは頷いた。美奈は心配そうに、大きな目をリサに注ぐ。美奈には難しい言葉がわからないので、細かいことを言ってもしかたがない。

「だけど、だれにでもうつるってもんじゃないのよ。体の免疫力が落ちてる人だけ」

リサはそれだけを言った。マスコミがその事実を伏せていることは、言わなかった。

美奈は少し考える様子を見せてから、かがむように小さくなって話し始めた。

「隣の洋子ちゃん、まだ中学生だし、ここにも入ったばかりだし、毎日ママが来てたの。それがあ、昨日も今日も、来てないの。それってえ、うつるからなのお？」

隣の洋子は半年前に収容された、おかつぱの髪が印象的な、黒目がちの少女だった。語尾を引っ張る症状が出ているだけで、まだ軽度といえる。

彼女の母親にはリサも会ったことがある。洋子と同じように黒目がちな、まだ若い母親だった。美奈の言うとおり、毎日あの距離を歩いて娘の世話をしに来ていたのだ。

「洋子ちゃん、すごく落ち込んでるのよ。ご飯もほとんど食べないし。美奈、話しかけたんだけどお、お返事もないの。うつるのやだから、会いに来ないの？ 美奈のママももう来ないの？」

美奈は心配そうにリサの目を覗き込んだ。大きな目がいつものように潤んでいる。リサは簡単な言葉を選んで、言った。

「大丈夫よ、大丈夫。心配しないで。美奈のママはぜったい美奈に会いに来るし、しばらくしたら、洋子ちゃんのパパだって、来るようになるよ。風邪ひいてるだけかもしれないし」

美奈は体を起こして、伸びをした。首が痛むのだろう、片手で軽く揉んだりする。重度の美奈には、物事を深く考えたり、ひとつのテーマを長く追うことができないのだ。もう洋子の母親のことは頭がないのだろう。

リサはそれを見て少し安心した。美奈は感染のことで深刻に悩むことはないだろう。

「美奈、わたしそろそろ行くね。また来るから、元気にいるのよ」
リサが言っただけで立ち上がると、美奈はにっこり微笑んで、首をかしげた。その瞬間、痛みが走ったのか眉根を寄せる。

「まだ首の薬あるの？」

「うん。それに、来週にはお薬の日があるから」

病気だということははっきりしているのに、医師に見せてもしかたがないという理由で、ブリッコたちには定期的な診察がない。月に一度症状を自己申告して、薬を処方してもらうことになっている。

「じゃあ、またね」

「また来てねえ」

顔の横で小さく手を振って、美奈はまた首をかしげ、眉根を寄せた。

隣の個室に、洋子の姿はなかった。

一階に下りると、奥の談話室に洋子の姿が見えた。ほかにはだれもいないのに、一人でぼつんと立っている。声をかけようと近づいたが、洋子の表情があまりにも深刻なので、話しかけるのがためらわれた。

リサは守衛室のドアをノックした。音楽を聴いていた青木が、再びスライドドアを開けて出てきた。

「洋子ちゃん、いつからああしてるんですか？」

青木は談話室を覗いて、ああ、と声を出した。

「今日は先生が上がりたてすぐに降りてきました。昨日もこの時間です。いつも彼女の母親がこの時間に来ていたから、できるだけエントランスの近くで待っているつもりなんでしょう。かわいそうに顔をしかめる青木に、リサは頷くことで同調し、それから声をひそめた。

「青木さん、収容者名簿が欲しいんです。実家の連絡先が載っているもの。持ち出し禁止なのはわかっています。でもどうしても必要なんです。どうか、お願いします」

青木は困ったように答えた。

「持ち出し禁止は、家族への差別抑制のため、わたしたちから政府に要求して策定された規則です。家族の情報がほかに漏れないので

あれば、例外は認めます。もちろんわたしは三木田先生を信頼していますから、コピーを差し上げておかまいません。しかし先生、理由を話していただくわけにはいきませんか？」

リサは一瞬だけ、迷った。ここで青木にブリッコ撲滅計画を話すことは、リサにとっては簡単で、しかも楽なことだった。青木は猛然と反対するだろう。自分とともに戦ってくれる人を確保する魅力に、リサは少しよろめいた。

しかしリサと違って、青木は殺される者の肉親である。それを聞かされて、青木の中で起こるであろう混乱と怒りを考えると、リサから伝えることはできなかつた。

「ごめんなさい、青木さん。今は言えません。決して家族や収容者のご迷惑になることはいたしません。お願いします。名簿をください」

リサは深々と頭を下げた。

「今すぐですか？ 先生、いったいあの子たちに、何が起こるんです？」

リサの真剣さに、青木は明らかに動揺した。リサは自分の不器用さに歯噛みした。

「今すぐです。お願いします」

政府に撲滅を実行させてはいけない。リサはもう、繕うことができずに、ただただ懇願する。

「わかりました」

青木は何かを察したように、守衛室に戻った。

リサは名簿のコピーを受け取り、エントランスを抜けた。振り返ると、青木の肩越しに洋子の黒いおかつぱ髪が見えた。

つづく

「明日には全国の収容者名簿が揃うというわけ」

二日後、リサは佐々木と会っていた。外にはだれの目があるかわからないので、リサの家まで来てもらった。

箱口令が敷かれ、ブリッコ撲滅については世間に伏せられていたが、いつだれからマスコミに漏らされるか、わかったものではない。特にお調子者でマスコミ好きな平良議員など、いつしゃべってもおかしくないのだ。

「一刻も早く、撲滅反対組織をまとめなきゃ。でも、佐々木くんはどう思う？ 政府発表やマスコミの報道よりも早く、関係者に撲滅計画を知らせるといふことを」

リサの懸念はそこだけにあつた。撲滅反対運動は、全国でバラバラに行なっても成果が上がらない。政府発表の前に撲滅計画を打ち明け、パニックに陥った関係者が事件を起こし、それがブリッコ撲滅の正当化につながるものが何よりも怖い。ただでさえ、世論は撲滅に向かつているのだ。拍車をかけて、スピードを速めることは、なんとしても阻止したい。

「難しいところですね。しかし目的を話さずに、組織をまとめることは無理でしょう。何かが起こった時に反対するため、というのは賛同者も得にくいと思いますが」

佐々木はリサが青木から手に入れた名簿から顔を上げて、そう言った。

「わたしが今までやってきた、施設の環境改善要求の組織充実、というのでは弱いかしらね。小原さんの救済会でもいいんだけど」

「弱いですね。それらの組織の存在は収容者の身内なら知っているにもかかわらず、今まで名を連ねていない人が多いのですから。体

制に向かって運動する、というのは面倒だし時間も浪費する。例えば身内のことでもそう考える人が大多数です。けれど撲滅計画を聞いたら、そんなこと言ってられません。面倒を乗り越えて団結するには、殺される、というインパクト以外にないのです。箝口令だって無視しましょう」

「なんだか佐々木は人が変わったようだ。学生のような印象が、急に口調も頼もしくなり、目が意志の力で燃えている。」

リサは足首のアンクレットに触った。よし、彼となら戦える。

「わかったわ。くれぐれも暴走しないよう、お願いするしかないわね。計画を伝えるのはいやな役目だけど、できるだけ数を確保しないとイケないもの。でも一般の賛同者を募るのは、政府発表のあとしかないってわけか」

「そちらは既成の組織名でいいですから、アナウンスを強化しましょう。それにしても、今までの運動のように時間をかけられるわけじゃないんです。組織は今までにない、大きな規模になるでしょうが、それにしただって全人口からすれば一握りにすぎない。どうするつもりです？」

佐々木は少し笑っているように見えた。リサは、数日前に会ったあの頼りない佐々木とは別人ではないかと思った。反感を持つほどの清潔感に溢れた、学生のような官僚だったのに。この表情からすると、彼にはすでに考えがあるようだ。彼と目が合うと、リサの心臓が、どきん、と大きく動いた。

「計画は練ってみたわ。これを見ながら聞いて。それから、佐々木くんの考えを聞かせてください」

リサは徹夜で仕上げた計画書を、コンピュータのディスプレイに呼び出した。

そのとき、計画書を隠す形で、テレビ電話の着信画面が広がった。相手は関東地区矯正施設守衛の、青木だ。

「はい、三木田です」

リサは受話器のアイコンをクリックして、応答した。ディスプレイ

イに青木の顔が広がるはずだった。

「先生、これはどこですか？」

佐々木が訝しげに尋ねる。リサにもわからなかった。デイスプレイに広がったのは青木の顔ではなく、茶色く汚れた視界に横たわる、金属の棒だったのだ。

「青木さん、青木さん！」

リサがデイスプレイに呼びかける。遠くのほうで、ドタン、ガタガタ、という音と、時折悲鳴のような声が聞こえる。

リサは一瞬動きを止め、次に意味もないのにデイスプレイを揺さぶった。言葉はない。ただ、息遣いが急に激しくなった。

「先生、これ、は、血、です、よ」

佐々木がかすれた声で茶色い汚れを指差す。確かに、ねっとりカメラに付着した血を、こすったように見えた。

「ああ、これは」

リサにはようやくわかった。横たわる金属の棒は椅子の足だ。コンピュータが倒れているのだ。

「みきたせんせい」

青木の声がした。どこにいるのだろう。デイスプレイにはまだ現れない。

「けいさつには、しらせたくない。せいじかには、しられたくない。うまく、やってください」

画面が動いた。青木が何かを映そうと、動かしているらしい。

「青木さん、あなたはいつたい」

映ったものを見て、リサは言葉を飲み込んだ。

血で汚れた画面の遠くで、洋子がおかっぱの髪を返り血で濡らしながら、女性を刺していた。うす笑いを浮かべながら、何度も何度も、女性の胸に包丁を振り下ろしていた。

リサと佐々木は息もできずにそれを見た。洋子は同じ動作を繰り返した。

長い時間が経ち、ようやく手を止めると、洋子は足下の死体を見

下ろして、嬉しそうに言った。

「ママあ、こんな日に限って来るなんて、さ・い・あ・く！」

ふふふふふ、と小首をかしげて笑いながら洋子が画面から消えると、あとには女性の死体だけが残った。リサと佐々木はまだ身じろぎもせず、それを眺めていた。

先に正気を取り戻したのはリサだった。

「青木さん、青木さん、返事をしてください、青木さん！」

何の返答もなく、画面も動かなかった。リサはディスプレイから隣の佐々木に視線を動かした。まっすぐディスプレイを見つめる佐々木の目は乾き切り、まぶたが断続的に痙攣を起こしていた。

「佐々木くん！」

リサの声で、佐々木はビクツと肩を動かした。手の甲で目をこすってリサに視線を合わせようとしますが、まぶたが勝手に瞬こうとするらしく、なかなか目が開かない。

「いったい何が起こってるの？ どうしよう、どうしたらいい？
ねえ、あれは何だったの？」

リサは佐々木の腕をつかんだ。佐々木はそのリサの腕をつかんだ。「と、とにかく、警察に連絡を。あ、だめだ、だめだ、ぼくたちが現場に行くしか」

「ああ、美奈」

リサの頭がようやくパニックから抜け出した。

「美奈の無事を確かめなくちゃ」

リサはすぐに立ち上がり、佐々木を引っ張った。佐々木は腰を抜かしているらしく、なかなか立てない。なんだこいつ。やっぱり学生官僚。どきん、としたわたしの時間を返してよ。リサの苛立ちは体中を駆け巡った。

「もう、さっきまでのアドレナリンを、もう一回出さないよ！」

リサは佐々木の足を蹴り、携帯電話を引っ掴んで、一人で玄関に向かった。

「先生、先生、待ってください、ぼくも行きますから」

佐々木はそう言うてから、ゆっくり立ち上がり、自分の足が立つことを確認するように足踏みをしてから、小走りにリサを追いかけた。

二人が施設に着いたとき、青木の願いに反して、すでに警察による現場検証が始まっていた。二人は中に入れてもらえず、エントランスから中の様子をうかがうしかなかった。

警察はみんなガスマスクをして作業をしている。リサは佐々木に囁いた。

「どうして警察にわかったのかしら。携帯電話は、持ち込みが禁止されてるのよ。外部と連絡が取れるのは、青木さんのコンピュータだけだった。それがわたしとオンラインになっていたのに……」

「だれかが隠し持っていたか、来訪者の携帯電話を使ったか、ですね」

「そうか、洋子ちゃんのお母さんが来てたものね」

リサは二人を阻んだ警察官に歩み寄った。

「中にいた人たちは、今どこにいるんですか？」

警察官は顎をしゃくって、リサの右後ろを指し示した。ガスマスクで表情がわからなかったが、ひどく横柄な仕草だった。

不愉快な気持ちを抑えて、示された方を見てみると、急ごしらえのテントが三基建っていた。

リサと佐々木はテントに近付き、揃って驚いた。三基のテントにはそれぞれ「ブリッコ（うつるぞ危険）」「けがブリッコ（うつるぞ危険）」「死体（まだうつるぞ危険）」という札がかかっていたからだ。しかも、けが人のテントさえも閉め切られ、処置が行なわれている様子がない。

「ひどすぎる」

リサは怒りで青ざめていた。けが人のテントをめくると、中では軽傷者と重傷者がごちゃ混ぜになっており、すぐに手当をしないと死んでしまうような患者もいた。

「美奈」

何人かが折り重なっているため目視で確認できず、リサは美奈の名を呼んだ。返事はない。

「佐々木くん、救急箱探して」

リサは言つて「ブリッコ」のテントに向かった。中に入ると、五人あまりが膝を丸めて座っていた。足を伸ばすスペースもなく、すし詰め状態だったが、このテントにこんなにも多くの人間がいることで、リサは少しだけほっとした。

「リサ！」

リサが呼ぶ前に、美奈がリサの名を呼んだ。

「良かった！ここにいたのね。いったい何が起こったの？」

「洋子ちゃんが厨房の包丁を持ち出して急に暴れたんです」

答えたのはリサの足下にうずくまる、施設の調理師だった。白衣を着ているのでそれとわかる。

「あなたまでここに入れられてるの？」

リサは驚いて尋ねた。

「はい、長いこと施設で働いてますから、感染しているかもしれない、ということと職員は全員ここに」

リサには言いたいことがたくさんあったが、それを言うべき相手は警察だった。まずは状況を把握したい。

「何があったの？順序立てて正確にお願いします。残念ながら、美奈にはそれができないから」

調理師は首をひねって、テント内を見渡した。数人の職員を除いて、あとはブリッコ症状の重い収容者ばかりだった。美奈も含めて、上目遣いで小首をかしげ、唇をすぼめている。

「調理師の小坂です。では、ぼくのわかる範囲でお話します。1時ごろ、昼食を終えてみんなが個室に戻ろうとする中、洋子ちゃんが一人で厨房にやってきました。今日は特別おいしかった、ありがとう、と言つて、そこにいる中川くんとはしばらく話をしていました。ぼくとほかの調理師が後片付けに食堂へ出た途端、中川くんの悲鳴が聞こえたんです」

「ボクが洋子ちゃんとしやべりながら、包丁を洗って片付けようとしたとき、洋子ちゃんが信じられないくらい力で、それをひったくったんだ。ホントにもう、信じられない力で。とてももう、信じられない力で」

声を出したのは中川という調理師だろう。うつむいて、信じられない、信じられない、と何度もつぶやいた。

小坂は中川を哀れみを込めて見つめ、ため息をついた。

「君のせいじゃないさ。しかたなかったんだ」

そして腰を浮かせて、リサの耳元で呟いた。

「中川くんは感染しています。まだ症状はほとんど出ていませんが、感染を自覚していて、そのせいで力が弱って、包丁を奪われたと思っっています。でも実際は、まだそこまで進行していません」

リサはうなずいて、中川を見た。中川はひざで頭を挟むようにして、髪の毛をかきむしっていた。

「ぼくたちが厨房にいそいで戻ろうとするのと、洋子ちゃんが包丁を持って走り出てくるのが、同時でした。ぼくたちは足がすくんでしまって、一瞬動きが止まりました。若い調理師二人が包丁をもち取るうと近寄りましたが、洋子ちゃんはその二人を、ためらわずに刺しました。でも走り去りながら、ごめんなさい、と謝っていました」

小坂は一度言葉を切って、深呼吸した。少し体が震えだしていた。リサはしゃがんで、視線を小坂に合わせた。

「洋子ちゃんは2階に上がったようでした。そして何か、大きな声で叫んでいました。守衛の青木さんが驚いて上がっていきました。ぼくたちは刺された二人の応急手当をしながら、外部に連絡しようとして守衛室に入りましたが、パスワードを知らないため、システムにログインすることができませんでした。そこに、洋子ちゃんのお母さんがいらっしやっただのです」

毎日の面会が、感染の発表を期に途絶えてしまった洋子の母親。三日経ってやってきたということは、その間ただ体調を崩していた

だけで、発表とは関係なかったのかもしれない。

「ぼくはお母さんの中に入れるべきではない、と思いました。親が見る光景ではありませんよ。二階で何が起こっているにしても、非常事態です。でも中に入れない口実を思いつけませんでした。ほんとのことを言うわけにもいきません。冷静になれば、いくらでも嘘をつけたはずなのに、あのときはパニックになっていました。同じようにパニックに陥った調理師の一人が、お母さんなら洋子ちゃんを止められるんじゃないですか、と言いました。お母さんも守衛室に白衣の調理師が何人もいることや、青木さんが見当たらないことで、何か不穏な空気を感じていたのでしょうか、青い顔をして、何も言わずにエントランスを抜けて二階への階段に向かわれました」

小坂の震えがひどくなった。それでも顔を上げて、何とか説明を続けた。

「ぼくは守衛室から飛び出して、お母さんの腕をつかみました。でも声が出ませんでした。そうだ、せめて携帯電話を借りて警察を呼ぼう、と考え、ぼくはやっとのことで、規則ですから携帯電話を預けてください、と言いました。お母さんは、今日は家に置いてきました、と答えました。それでぼくは手を放してしまいました」

リサは思わず、小坂の肩をつかんで揺さぶった。

「お母さんは携帯電話を持ってなかったの？ 本当に？」

小坂は驚いたらしく、体の震えが止まった。

「じゃあ、いつたいだれが、どうやって警察を呼んだの？」

小坂は目を丸くしてリサを見つめた。

「三木田先生じゃないんですか？」

リサも目を丸くして、小坂を見つめた。

「何ですって？」

小坂は言った。

「警察が、三木田先生から通報があった、って言いました」

リサはわけがわからなくなった。頭を振り、それについて考えるのはやめることにした。

「ごめんなさい、どういふことなのか、あとで考えるわ。お母さんが2階に行つて、それからどうしたの？」

「はい、ぼくが手を放してお母さんが2階へ上がろうとしたとき、青木さんがおなかを押さえて、落ちるみたいにして降りてきたんです。ぼくたちはぶつかつて、三人とも階段の下に転がったんです。」

青木さんのおなかからは、かなりの出血がありました。青木さんはぼくの顔を見ると、あの包丁はどうなつてるんだ、切つても切つてもまだ切れるぞ、脂がちつとも刃につかない、と言いました。ぼくは死にそんな人がそんなことが怖くつて、無視して二階に上がろうとしました。でも腰が抜けて立てなかつたんです。青木さんは這うようにして、守衛室に向かいました。あそこには調理師がまだ何人かいるはずだし、手当は彼らに任せられると思つて、ぼくも這つて階段を上りました。洋子ちゃんのお母さんは、震えているものの、ちゃんと足で歩いて二階に上がりました」

リサは青木が自分へ連絡してきたとき、瀕死だったことを思い出した。

「守衛室にいた調理師はどうしたの？ 青木さんの手当はできなかつたんじゃない？」

小坂は何度もこまかくうなずいた。

「そうなんです。あとで聞いたのですが、彼らは刺された仲間と、その手当をしている中川くんを食堂に残して、外部と連絡を取るために街に向かつて走り出していました。でも途中で腰が抜けたり、反吐を吐いたりして、結局たどり着いたのは警察に通報があつてからでした。彼らはさつき、ふらふらになつて戻つてきました。横になるために、けが人テントに入っています」

「きつと青木さんは、そのときわたしに連絡をくれたんだわ。2階では何があつたの？ 何人死んだの？」

小坂は自分の肩を抱くようにして、小さくなった。また体が大きく震えだした。

「洋子ちゃんは、症状の軽い者ばかりを刺していきました。何かわ

あわあ叫んでいました。殺されるわよ、殺されるわよ、と言うのが聞き取れました。病気の進行した者は、このとおり、みんな無事です。怖かったでしょうが、もうすっかり忘れていきます。洋子ちゃんはその、振り返り、お母さんを見つけてしまいました」

中川が、ひい、と声を上げた。

「洋子ちゃんはお母さんを見ると、今ごろ何しに来たの、と言いました。お母さんは足ががくがくして、洋子ちゃん、と言うのがやつとでした。洋子ちゃんはもう一度、何しにきたの、と聞きました。病気をうつされるのが怖いんでしょう、だから何日も洋子をほったらかしにしたんでしょう。そう言って、包丁を突き立てようとした。お母さんは転がるように階段を下り、なおもエントランスに向かって逃げようとしたが、途中でつかまり、何度も何度も…」

再び中川がひい、と声を出した。ずっと一階だけが人の手当をしていた彼が、唯一目の当たりにした殺戮現場だったのだろう。リサもその場面だけはカメラを通して目に行っているのだ。ディスプレイに広がった青木の血痕が、今また目の前に広がっている錯覚を覚えた。

「ありがとうございます。よくわかりました。警察は、どのくらいで来たの？ 洋子ちゃんはどうなったの？」

「洋子ちゃんはそのあと、自分で包丁を洗い、おとなしくしていました。警察はすぐに来ました。本当にすぐです。洋子ちゃんが包丁を洗い出して、10分前後だったと思います。そのときは、街へ走った調理師が通報したのだと思っていました。洋子ちゃんは自分で警察に両手首を差し出しました。警察は洋子ちゃんに、手錠ではなくマスクを掛けて、連れて行きました。まだ敷地内にいるんじゃないでしょうか。ブリッコを署内に入れるのはけしからん、とか言うてましたから」

小坂が言い終わると同時に、佐々木がテントに入って来て、リサの肩を叩いた。

「先生、なんだかおかしな具合です。ちょっといいですか」

リサは小坂と中川にお礼を言つて、美奈に手を振り、テントの外に出た。

「どうしたの？」

「救急箱がないので、警察に聞いたんです。せめて止血だけでもさせてくれ、つて。でも実際、事件から2時間近く経つてますから、流血し続けてる患者は死んでました。それでも軽傷者の傷口を押さえるガーゼとか、どこかにないのか聞いてみたんです。そしたら不審な顔もせずに、施設から救急箱を取ってきたんです。ぼくの素性も聞かずに、ですよ。で、今まで手当をしながら思い返したんですが、ここに着いてから、ぼくたちは一度も身元を尋ねられていません。名前はまあ、三木田先生が有名人だから聞かれなかつたんだとしても、普通は何しに来たのか、くらい聞きますよ。何で事件を知つてるんだ、とか」

言われてみれば、そうだった。二人は施設に着いてから、ごく当たり前に対応されている。ほかに一般人がいるならともかく、警察と事件の当事者たち以外は、リサと佐々木しかないのだ。事件はまだ報道されていないはずだ。報道されれば収容者たちの家族がやってくる。

「守衛室のコンピュータで、通信記録を見たんじゃないかしら」

「それならそれで、だれから連絡があつたのか、だとか、何を話したか、だとか、いろいろ聞かれるのが自然じゃないですか。なんていうか、ぼくたち、来て当然だと思われてるみたいなんですよ」

「そういえば、おかしなことがもう一つあるわ」

リサは、小坂が警察に聞いた通報者の名前を言った。

「先生が、通報したですつて？」

「わたしは青木さんに口止めされたのよ。青木さんは瀕死の状態、最後の力で、わたしに警察には知らせるな、つて言ったのよ。そのわたしが、警察に通報したことになつて。それに、もつとおかしなことに、やっぱり施設内に使える携帯電話は一つもなかつたのよ。」

洋子ちゃんのお母さんは持って来てなかった。守衛室のコンピュータはパスワードがないと使用できない。青木さんが刺されて守衛室に戻る直前に、数人の職員が通報のため街に向かったらしいんだけど、彼らが着く前に、警察は通報を受けてる。わたしたちが青木さんのコンピュータを通じて施設の中を見ていた間に、だれかが通報したとしか考えられないのよ」

自分でそう言い終わった途端に、リサは気付いた。佐々木も同時に気付いた。

「あの通話が盗聴されていたんだわ！」

声を上げたリサの口を、佐々木が押さえた。

「だから警察は当然、ぼくたちが来ることを知ってたんです。先生の動きは、完全にマークされてるってことですね」

事件にシヨックを受けているのは、病気の進行していない軽度の患者と職員に限られていた。軽度の患者はほとんどが死んでいるか、重傷を負っていて、その数は30人にのぼった。死亡18名、意識不明の重体5名、失神しているもの3名、口をきけるのは残りの4名だけだった。

リサと佐々木は比較的軽傷だった、田村真澄に声をかけた。

「真澄ちゃん、怖かったわね。もう終わったのよ。もう大丈夫だからね」

真澄は十四歳で、まだ瞳に理知的な光が残る、大きな三つ編みの特徴の少女だった。今日はその三つ編みに、血がこびりついている。

真澄は腹を刺されたが、反射的に身を引いたため、傷が浅くて済んだ。佐々木によって腹部に包帯が巻かれていた。

声をかけたリサに、真澄は驚いたように目を丸くしてみせた。

「三木田先生、終わったんじゃないんでしょうお？ 洋子ちゃんが言ってた。これからもっと怖いことが起こるう、って」

リサと佐々木は顔を見合わせた。

「何のことかしら？」

言いながらも、二人は撲滅計画のことを思った。それしかない。

もつと怖いことなんて。

「洋子ちゃんがねえ、殺されるわよ、殺されるわよ、って言ったの。みんな一斉に、近いうちに、殺されるわよ、って。怖いのはあ、殺されることなんかじゃない。いつ殺されるか、びくびくしながら待ってるのがあ、本当に怖い。だからみんなあ、今わたしが殺してあげるう、って」

間違いない。洋子は撲滅計画を知っていたのだ。

「真澄ちゃん、ほかに洋子ちゃん、何か言ってたなかった？」

リサは青木が警察への通報を恐れた理由に思い当たりながら、聞いた。

「ううん、それだけ。ねえ、先生、ほんとにみんな、殺されるの？」

リサは曖昧に笑って、首を振りながらテントをあとにした。佐々木を見る。

「どうしてわかったの？」

「だれかが意図的に情報を漏らしたとしか考えられませんね」

リサは施設から駅に向かう道々、加藤と小原にメールを入れた。

「すぐに帰京し、三木田邸に集合してください。帰京の際、入手した名簿を使い、一人でも多くの味方を連れて来てください。撲滅計画を話してもかまいません。非常事態です」

どうせこのメールも警察が政府に筒抜けだろう。かまわない。リサは佐々木を見た。

「計画を知っていたのは、青木さんと洋子ちゃんだけ。洋子ちゃんは最近ずっと、一階の談話室にいたわ。考えられるのは、何者かが守衛室のコンピュータに撲滅計画を送り、偶然洋子ちゃんがそれを見たか、驚いた青木さんの独り言なんかを耳にしたか、ということかしらね」

「でもいつたいたれが、何の目的で？」

「決まってるわ。施設内部に混乱を起こして、何らかの事件を招き、撲滅を正当化するためよ。政府のやったことでしょう。狙い通りになっただわね」

佐々木は歩きながらそっと、リサの肩を抱いた。リサは身を任せた。

「何が起こつても、ぼくは最後まで戦います」

リサは自分の部屋で、洋子による惨劇を見て腰を抜かしている佐々木を思った。彼は本当はこわいのに違いない。それでもリサは、佐々木の体温を感じ続けた。頼りなくても、臆病でも、自分といっしょに戦ってくれる人がいるのは、心強かった。

「きつと政府は、すぐにも計画を発表するでしょうね。わたしたちは、まだ何の準備もしていないのに」

「世論は発表をを歓迎するでしょう。大量殺人者を出したブリッコ

を、生かしておくな。全員殺せ。ブリッコのいない、美しい日本を、今こそ実現しようではないか。あのおエライ議員先生たちが、英雄になるってわけです」

佐々木のセリフは、そのまま次の日にネット上を駆け回った。テレビ番組でも、洋子の事件と、ブリッコ撲滅運動がいつしよになつて流れていた。

「これ以上われわれの生活をおびやかすブリッコたちを、野放しにしておいてはなりません。国民の皆さんを守るのが政府の役割です。お任せください。本日、国民の声にこたえ、ブリッコ撲滅委員会を招集いたしました。当委員会は国民を守るための組織であります。速やかに、ブリッコ撲滅を実行するための組織であります。や、ありがとう。やや、どうも」

首相が官邸前で大演説をしていた。取り囲む群衆の中には、花束を持った若い女性がちらほら見える。大喝采。大喝采。リサはテレビを消した。

「こうなってしまった以上、残る手段はただ一つです」

リサは所狭しと自宅に集まった百二十名の賛同者に向かって叫んだ。

「こちらの情報は敵に筒抜け、愚民どものおかげで世論は見ての通り。情報戦では勝ち目がありません。できることは、撲滅当日、武力で立ち向かうことだけです」

リサは言いながら、無力感に襲われるのをどうすることもできなかった。本当に、ほかにできることはないのだろうか。

部屋の中を見渡す。酸欠を起こしそうな密度。けれど部屋に納まってしまうだけしか、日本中に味方はいないのだ。

賛同者のほとんどは入手した名簿を頼りに集めた、各矯正施設の関係者だった。リサは大学内やマスコミの、普段リサの意見に理解を示していた学者やコメンテーターにも声をかけたが、全員へらへらと笑って通話を切ってしまった。佐々木や加藤、小原も考えられる限りの知人を説得したが、だれも政府を敵に回したがらなかった。

たったこれだけで、とりさが思ったそのとき、玄関を叩く音がした。

「賛同者が増えるのかもしれないね」

リサが人々をかきわけかきわけ、やっと玄関のドアを開けると、そこには壁のように大きな警官二人と、平良議員が立っていた。

「ご無沙汰してます、三木田センセイ。はい、これ逮捕状。自衛省の佐々木くんの分と、二枚出てますよ、ひひひひ」

警官が一人一枚、紙切れを広げて見せた。確かにリサと佐々木の逮捕状だった。

「わたしがいつたい、どういう理由で逮捕なんかされるんですか」
平良はリサの問いを無視して、部屋の中に向かって叫んだ。

「おい、佐々木くん、いつしよに来るんだよ〜！」

平良はにやにや笑って、リサを見た。

「すごい人口密度ですな。学会でもやってるんですかな。今や、センセイに教室を貸す大学はありませんからな、はっははは」

リサは平良を無視して警官に詰め寄った。

「ねえ、わたしが何の罪を犯したんですか。まさか反逆罪とか共謀罪なんて時代錯誤なこと言わないでしょうね」

人々をかきわけ、佐々木も玄関に着いた。平良の顔を確認して、露骨に嫌そうな顔をした。

「平良先生が、どうして警察といっしょに動いてるんです」

そのとき、警官がリサの質問に答えた。

「三木田リサと佐々木邦生、二人を電波法違反により、逮捕する」

「電波法？ 何をしたっていうのよ」

平良は相変わらずにやにやして、リサと佐々木をかわるがわる見比べた。

「おやおや、お忘れですか、先日起きた収容所での事件、通報したのはセンセイだっていうじゃありませんか。どうしてセンセイが、遠く離れた施設内での惨劇を知り得たのか。それは盗聴していたからですよ。ね、ね？ そうでしょう。エスパーでもなきや、わかる

わけないですよ。不思議に思って探してみたら、守衛室から盗聴器が発見されました。で、いつしよに現れた佐々木くんも同罪です。二人して盗聴してたことがわかってます。いやらしいですなあ、まったく」

リサはみるみる青ざめ、しばらく声が出なかった。佐々木は逆に顔を真っ赤にして、珍しく声を荒げた。

「でっちあげだ！ 盗聴してたのはそっちだろうが！ 三木田先生の回線を傍受してたんだろ。ぼくらは何もしてない。守衛室の通話記録を見ればわかるじゃないか、ぼくらは守衛から連絡を受けたんだ！ 通報者の捏造はこのためだったんだな！ そもそも事件を起こすために情報を流したのは政府なんだろ！」

佐々木が平良につかみかかろうとするのを、警官が押さえつけた。部屋の中から数人が警官に飛びかかりかけたので、平良があわててドアを閉めた。警官の一人が平良に代わって屈強な体でドアを押さえると、平良は必要以上にゆったり、ほっ、ほっ、ほ、と笑って、息が続かなくなり咳き込んだ。

「げほげほ、いやいや佐々木くん、通話記録ぐらい調べましたよ。でもあの日はだれともコンタクトしてませんでしたよ。残念ですね。さ、連れて行きなさい」

佐々木は抱えられ、リサは腕をつかまれた。あわててリサは、ドアの外から、部屋の中に向かって叫んだ。

「あとを、あとをよろしくお願いします！」

佐々木とリサを引き連れた警官が平良とともに姿を消してから、ようやくドアを押さえていた警官がその場を離れた。飛び出した男性が数人、警官に挑みかかったが、警官がひらりとパトカーに飛び乗る方が早かった。

「さてさてお二人さん、リーダー三木田先生と、自衛省に出入りできる佐々木くんを失ったら、あの団体には何ができるだろうねえ」

警察に連れて行かれると思いきや、パトカーは首相官邸に着いた。

そこでは会議の真つ最中だった。

平良が「ブリッコ撲滅委員会へ、ようこそ」と言つてにやりと笑つた。

二人は手錠を掛けられたまままで会議室に通され、末席に押さえ込まれた。

「お二人には、罪を償つてもらわなければならないね」

法審大臣がカン高い声を上げた。見回すと、加藤と小原がいないだけで、メンバーはブリッコ対策委員会とまったく同じだった。社産党の車崎が、ぬめり、とりサを見た。

「法治国家ですからな」

平良が調子よく、そうですそうです、と合いの手を入れた。

「ブリッコどもといっしょに殺しちゃってもいいんだけどね、もつと素敵なことを思いついちゃったわけよ。命は助かるんだから、感謝するんだね」

法審大臣が言つて、さも楽しそうにくっくくくく、と笑つた。それに続いて、会議場全体が、いやらしい笑いに包まれた。

リサが敗北感に耐えきれずうつむくと、自分の足首が目に入った銀のアンクレット。その細いシンプルなチェーンを見ると、リサの下腹部に消えかけていた力が湧いてきた。条件反射のようなものかもしれない。これほど救いのない場面でも、リサはアンクレットを見るだけで戦う態勢に入ることができる。

気を弱くしている暇はない。どんなことを言われても、最後まで戦つてやる。リサはそう決意して、顔を上げた。法審大臣がエヘンオホン、と咳払いをして、手元の紙を読み上げる。

「三木田先生と佐々木くんには、ブリッコどもを殺してもらいます」
会議場は、大爆笑に包まれた。平良は立ち上がり、手を叩いて「ブラボー、ブラボー！」と大声で叫んでいた。法審大臣も、車崎も、リサと佐々木を見ながら手の甲で涙を拭き拭き、大笑いした。笑いすぎて椅子から転げ落ちる首相を見ながら、リサはゆっくりと失神した。

5 エピソード

5

気が付いたとき、リサは柔らかいベッドに寝かされていた。体を起こすと、隣にもう一つベッドが置いてあり、佐々木が寝ていた。部屋の中は殺風景で、ベッドと机、嵌め殺しの窓があるだけだ。壁紙は薄いグリーンで、窓には朝の光が入っている。手錠は外されていた。

リサは立ち上がって、窓の外を見た。水を吹き上げない噴水が見える。亀と鶴が彫刻されている噴水。あれは取り壊しが決まっているものだ。ということは、ここは首相官邸の一室だ。

リサはしばらく庭を眺めた。青い竹の向こうから、太陽の光がにじんでいる。光は石畳に落ち、複雑な影を作っている。リサはその光景だけを焼き付けて、目を閉じた。このまま何も考えなくて済むなら、どんなにいいだろう。

「あれ、先生。朝ですか？」

佐々木の間延びた声がして、リサは目を開けた。殺風景な部屋が目に入る。

「おはよう。わたしは気を失って、そのまま眠ったらしいのよ。佐々木くんが運んでくれたの？」

佐々木はリサの問いに、うつむいて頭を掻いた。

「いや、あの、実はぼくも気を失ったらしいんです。あまりにショックで……」

ここまで頼りにならないとは思わなかった。リサはぼかんと口を開けていたが、やがて気を取り直して佐々木に近付いた。

「ねえ、どうにかしてここを抜け出せないかしら」

リサが小声で言った途端、ドアがドンドン、と叩かれた。

「はい」

佐々木が答える。鍵を開けて入って来たのは、平良だった。

「あら、服着てるじゃないですか。せつかく二人きりにしてあげたのにねえ」

平良は言いながら、いつものにやにや笑いを浮かべながら部屋の中をうろろ歩いた。

「実は本日、撲滅を実行することになりました。昨日お二人がぶつ倒れてから、委員会で決めたんですな。そういうわけですから、お二人には関東地区矯正施設で派手に暴れてもらいます。説明がありますから、どうぞ会議室へ」

リサと佐々木は、周りを四人の首相SPに囲まれて、会議室へ連行された。会議室には首相と法審大臣が座っていて、二人をたいそつ機嫌良く迎えた。

「本日午後一時より、ついにブリッコを撲滅いたします。お二人には関東地区矯正施設にて銃による掃討作戦に参加していただきます」

法審大臣がいやにかしこまってそう言った。首相は大きく頷き、大臣を見た。

「世間への発表はいつになるのかね」

「午後零時、自衛省にて大臣から発表されます」

「ふむふむ。ともかく、内閣支持率がまた上がるということだね。よろしいよろしい」

「おやおや、三木田先生、お顔が青いようですが、大丈夫ですか？」

平良が相変わらずへらへらと笑いながら、リサに近寄って囁いた。リサはまっすぐ首相を睨み続けた。

「お二人はこれから朝食をとっていただき、午前十一時、地衛隊関東第一部隊とともに関東地区矯正施設にむけて出発してもらいます。銃は現地で受け取るように。着く前に渡すと、何をしでかすかわかりませんからな」

法審大臣が言つと、平良が顔の前で大きく手を振って茶々を入れた。

「四方を自衛隊員に囲まれた車の中ですよ、自分を撃つことだって

できませんって」

「では、お二人が日本の明るい未来のため、立派に働かれることを期待しておりますよ。ブリッコ撲滅が成った暁には、お二人は国民からちやほやされること間違いなしです。プロマイドだって飛ぶように売れるでしょう。三木田先生の過去は水に流れます。いやあ、よかったですなあ。では、ご無事でお戻りください」

首相が言い終わると同時に、法審大臣と平良から笑いが漏れ、リサと佐々木の体はSPによって拘束された。

午後零時半、二人は関東地区矯正施設の前で、地衛隊に監視されながら待機していた。列の中央、どこからも逃げられないよう隊員に挟まれる形で、立たされたままだった。まだ銃は渡されていない。「発表、されたんですね」

佐々木がリサに顔を寄せ、呟いた。リサは小さくうなずく。携帯電話を取り上げられているため、状況がわからない。けれどもブリッコ撲滅が拍手で迎えられていることは、簡単に想像できた。

小原たちはどうしているだろう。何か計画をたてたのだろうか。

ここまで来て、何かできることがあるのだろうか。

「もう、撲滅を止めることはできないのかしら」

リサが思わずそう呟いたとき、隊長がつかつかと前に出た。

「現在午後零時四十五分。これより銃とガスマスク、酸素ボンベを配布する。各自装着して待機するように。間もなく突入である」

リサの背中に冷たいものが走った。隣を見ると、佐々木は足が震えてガクガクしている。小原たち撲滅反対運動のメンバーがどこから出てくるのではないかと、辺り一帯を見渡したが、だれもいなかった。

リサはガスマスクの装着を拒否した。わたしは最後までブリッコの側に立つのだ。彼ら彼女らと同じ空気を吸い続けるのだ。リサは足首のアンクレットを確認した。

「佐々木くん、たぶん死ぬわよ。だけどわたしは最後まで戦う」

リサは小さな声で佐々木に言った。佐々木もガスマスクは着けずに、銃だけを手に取った。

「ぼくも、そのつもりです。力を尽くしましょう」

佐々木はにつこり笑った。やはり学生のような青臭い笑顔だった。しかも全身で震えていた。

「ありがとう、本当に。佐々木くんは官僚でいられたはずなのに」

「いえ、先生から離れるなんて、考えたこともありません」

ふと、リサの頭にある考えが浮かんだ。もしかすると大失敗に終わるかもしれない。けれども何もしないよりは、試してみたほうがいいに決まっている。

リサはガスマスクを着けることにした。

そのとき、号令が轟いた。

「突入！」

リサは佐々木とともに、否応なしに施設内へなだれ込んだ。

リサは、二階へ真っ先に上がった。美奈。美奈を何とか逃がさなければ。佐々木もすぐ後ろを追ってくる。地衛隊員はあちこちで銃声を轟かせていた。全員を救うことはもう絶望的だ。とにかく一人美奈一人を救うことで、リサは自分の立場を貫きたいと考えていた。リサが美奈の部屋に着いたとき、美奈は部屋の隅で小さくなっていた。ブリッコの進行した彼女でも、本能的な死の恐怖から逃れることはできないのだ。

「美奈、これを被るのよ」

リサがガスマスクを取り、顔を晒すと、美奈は驚いてわあわあ泣き出した。

「なんでえ、なんでリサがいるのぉ？　なんであたしたちがあ、殺されるのぉ？」

美奈は泣いても涙を流さない。涙は瞳からこぼれないところに留まって、決して流れ落ちることがない。

美奈はパニックを起こしていて、リサの差し出すガスマスクを抱えたきり、被ろうとしない。リサは佐々木の手をつかんだ。

「美奈に無理やり被らせて。二人で何とか地衛隊に混じって出るのよ。ほら、わたしのジャケットを羽織って、美奈、早く！」

「先生、そんな敵の想定内です！　すぐバレル！」

「何もしないよりマシでしょうが！」

そのとき、美奈が佐々木にすがりついた。ガスマスクを放り出し、佐々木の手を取ったかと思うと、首をかしげ、こぼれない涙をいっぱい溜めた瞳を大きく広げて、上目遣いで彼を見つめた。

「ねえ、おねがい、リサの代わりに連れて行ってください。リサは自分がブリッコじゃないからってえ、いつもいつも余裕たっぷり、いい人のフリができちゃうのお。中学生のときだって、正義の味方気取りで美奈のこと守ってえ、裏ではいじめっ子たちと仲良くしてたのよ。美奈、もお、そういうの、がまんできなあい。どおしてリサが殺されないのお？」

佐々木は美奈の潤んだ大きな目をじっと見つめていた。返事もせず、まばたきもしない佐々木の横で、美奈の言葉がリサの脳に突き刺さった。

次の瞬間、リサは手に持っている銃を、美奈の頭蓋骨向かって、ぶっ放した。

「この、ブリッコ女」

美奈の体は、飛び上がってひとりでに、ベッドに横たわった。血が壁一面に飛び散った。「we are good friends」と書かれた二匹の猫のポスターが、血みどろになって、光っていた。リサはそれを凝視した。

「……彼女、錯乱していただけですよ」

佐々木はそう言って、腰を抜かした。

地衛隊員が二人、美奈の部屋に入ってきた。

「よし」

それだけ言って、隣の個室に向かった。

「よし」

「よし」

「よし」

中の死体を確認する声が、何度も何度も聞こえた。

「関東地区矯正施設、ブリッコ撲滅完了！」

廊下の突き当たりでそう叫ぶ声が出て、施設内は拍手で埋め尽くされた。

リサは拍手を聞きながら、足首のアンクレットに手をかけ、一気に引きちぎった。そしてそれを、だれに向けてでもなく、投げつけた。

佐々木は腰を抜かしたまま、そんなリサを見つめ続けた。

エピソード

「いらつしゃいませ」

料亭に入った平良を迎えたのは、リサだった。平良は直立したまま、彼女の頭の前から足袋を履いたつま先までを、何度も確認した。「み、三木田先生、大学をお辞めになって、こんなところで働いてらつしゃったのですか」

「平良先生、こんなところで立ち話もなんですから、どうぞお部屋へ。ご案内いたします」

リサは平良の鞆を受け取って、さっさと歩き出した。

「ええと、三木田先生、いつからここに？」

沈黙が怖くて、平良は大きな声を張り上げた。リサは振り向いて、つとしゃがみ込み、そこにあつた襖を開いた。

「こちらのお部屋でございます。お連れ様がお見えになるまで、お話しさせていただいてもよろしいでしょうか？」

平良は、うはあ、とか、いへえ、とかいう声を出して、部屋に入った。リサが後から入り、襖を閉めた。

「ブリッコ撲滅が終わってすぐに、仲居になりました。ここにいると、重力をあまり感じませんので」

「は、はあ、そうですね。えっと、その」

平良は突然、畳に額をこすりつけて土下座した。

「申し訳ございませんでした！ あおう、せ、先生、どうかぼくを殺さないください」

リサは目を丸くしてその様子を見ていたが、平良がいつまでも顔を上げないので、とうとう吹き出してしまった。

「平良先生、顔を上げてください。どうしてそんなことをおっしゃるんですか」

「だ、だって、せ、先生が親友をこ、殺したのは、ぼぼぼぼ、ぼくらのせいだし、き、きつとすぐく怒ってるんだと」

リサは微笑んだ。唇が清楚なカーブを描く。

「意外ですね。あなたたちのさせたかったことを、わたしはただけですよ。どうしてそれをそんなに怯えるんですか。それなら最初から、施設のコンピュータに撲滅計画なんか、送らなければよかったのに」

平良は頭を振った。

「あれは、あれは、佐々木がしたことだ」

リサの微笑が歪んだ。

「佐々木くんが？」

平良はハツとして、髪の毛をかきむしった。

「し、知らなかったんですか、佐々木は最初から最後まで、我々の駒だったんですよ。三木田先生を信用させて、監視する役目だったんです。すぐ側で先生の行動力を見て危機感を持った佐々木が、施設に情報を流そうと言い出したんだ」

リサはす、と立ち上がった。

「ごめんなさいごめんなさい、殺さないで、殺さないで」

「自分たちはたくさん殺したのに、この手で一人殺したわたしが、怖いんですか」

リサは優しく笑った。

「安心してください。お連れ様をお迎えに行くだけですから」

再び額を畳にこすりつける平良を置いて、リサは部屋を出た。そこに、ほかの仲居に案内されて、平良の連れがやって来た。

「佐々木くん」

「あ、三木田先生」

二人は足を止め、視線を交わし合った。

「出世なさったようで、何よりですね」

リサが言うと、佐々木はやはり、学生のように笑った。

「先生のおかげです」

「すっかり、騙されていたんですね、わたし」

「きつとぼくは、根っからの嘘つきなんでしょう」

リサは頭を下げた。

「ごゆっくりどうぞ」

佐々木は頷いて、平良の待つ部屋の襖を開けた。

リサは調理場に入り、大きな声で言った。

「菊の間、お揃いです」

調理師が一人、笑い出した。

「リサ、おまえマスカラが落ちて、タヌキみたいになってるぞ」
笑われたリサは指で銃の形を作り、

「バーン」
と一発、ぶっ放した。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9196i/>

ブリッコ撲滅委員会

2010年10月8日15時13分発行